五十四年倦怠記

五十中年倦怠記

人　物

堀田賢一（56）会社員

堀田啓子（54）主婦

横田宏（59）釣り人

堀田香織（22）賢一、啓子の娘

○堀田宅・外観

閑静な住宅街に立つ、白い壁の家。

○同・リビング

高級な家具が置かれた、広いリビング。

堀田賢一（56）、リビングでコーヒーを飲んで新聞を読む。

堀田香織（22）、賢一に「豪華3泊4日クルージングの旅」のペアチケットを渡す。

香織「はい、これ。お母さんと二人で」

賢一、チケットを見て、

賢一「……あのな、香織。すごく嬉しいんだけどな……お父さんもお母さんもそういう気分じゃ……」

香織「だから言ってんでしょ？鈍いなあ」

賢一「……？」

香織「お互い好きだったから結婚したんでしょ？今からならまだ、間に合うよ」

賢一、チケットに目を落とす。

賢一「……」

○無人島・浜辺

空にカモメが飛んでいる。砂に木の棒が立ててあり、その先端に白い布がかかっている。

T「15日後」

燻っている焚火。その近くに座っている堀田啓子（54）、木の枝を二本火の中に入れる。

賢一、大量の木の棒を持って歩いて来て、啓子から離れたところに座る。

啓子と賢一の服は汚れてボロボロ。救命胴衣をつけている。

遠くの方で、船の汽笛が聞こえる。

賢一、立ち上がり、

賢一「おーい！おーい！」

啓子「（小声）気づくわけないでしょ」

賢一、力なく座る。

啓子「ねえ、お腹空いた。魚にして」

賢一「……たまにはお前が取りに行ったらどうだ」
啓子「なんで私が。あんたが行ったらいいじゃない。一人で。浮気もし放題」
賢一「だからそれは誤解だと言ってるだろ」
賢一、一歩啓子に近寄ると、
啓子「あ、その線からこっちは私の場所だから」
賢一の足元に、一本の線。
賢一「……少しは大人になれよ」
啓子「大人になっても、あなたが嫌いなの」
と、啓子、海を眺める。
啓子「私ね、貴方が魚を取ってこなくても、貴方の肉を食べて生き残ろうと思ってるの。そんなの嫌でしょ？私も嫌。不味そうだもん」
と、浜辺に石を力なく投げる。
賢一「……」
賢一、足早にその場を去る。
焚火の火は消えかかっている。啓子、

その火を虚ろな目で見つめる。

○同・川岸の岩場・洞窟中

澄んだ水が流れている。岩には正の字の印がいくつも付いている。賢一、そこに一本書き足す。

賢一、ボロボロの旅行鞄を開け、中から「豪華3泊4日クルージングの旅」のペアチケットを取り出して見つめる。

○同・浜辺

啓子、虚ろな目で焚火を見つめる。

そこにやってくる賢一。木の箱から小魚を2、3匹出す。啓子、舌打ち。

賢一、啓子から離れた場所に座る。賢一、啓子を見つめる。

賢一「……ずっと気になってたことがある」

啓子「……」

賢一「どうして、結婚した」

啓子「……」

賢一「どうして、俺らはこうなった」
あたりが次第に暗くなってきている。
焚火の火はほぼ消えかかっている。
啓子「火、もうないの」
賢一「……そうか」
啓子「……そうよ」
遠くから船の汽笛が聞こえるが、賢一、無視する。
汽笛の音、次第に近くなり、エンジン音も聞こえる。
賢一、顔を上げると、小型のボートが一台、こちらに向かってやって来る。
賢一、笑顔で立ち上がり、
賢一「おーい！」
と、ボートに向かって手を振る。
賢一「おーい！おーい！」

○同・横田のテント前（夜）
森の中にテントが一つ張ってある。啓子、賢一、魚にくらいつき、水を飲む。

横田宏（59）、やってきて、

横田「豪華客船が難破したってニュースの。あの事故からずっとここにおったんかいな。よう生き延びたなあ」

横田、マッチでタバコに火をつける。

横田「わしが通りかかってとんだ幸運やで。ところで、お前ここで二人ずっと過ごしてたんか？」

賢一「……はい」

横田「成る程、愛の力というやつやな」

賢一、啓子「……」

横田「でも二人でよかったわ。十人とかおったらえらいことやで、船何度往復させても間に合わへん」

賢一「あの、そんなに船小さいんですか」

横田「小さいも何も、わしが乗ってきた船は乗れて２人やで。まあ奥さんを先に乗せて、あんたにはちょっと待ってもらうことになるやろうな」

賢一「……」

横田「（笑って）安心せえ、そんなに時間はかからんから」

賢一、食べるのをやめ、黙り込む。

空は雨雲がかかって淀んでいる。

○同・浜辺（夜）

浜辺に一人座っている啓子。そこに賢一、やってきて隣に座り、

賢一「やっと帰れるな」

啓子「……」

賢一「……なあ、帰れたら、もう一回旅行に行かないか？」

啓子「……」

賢一「これ以上、香織には迷惑をかけたくないだろ？お互い、夫婦であり両親なんだから」

啓子「……」

賢一「……俺も今まで悪かったよ。ごめん」

啓子「……ごめん」

賢一「……」

啓子「……私ね、再婚するの」
賢一「！」
啓子「5歳年下なの。年収も身長も高いし、私を肯定してくれるの。貴方と違って」
賢一「……」
啓子「ほんとに仲直りできると思ってるの？できる訳ないでしょ。もう限界なんだから」
と、少し笑う。
賢一「……」
賢一、ふと足元に大きめの石が落ちているのを見つける。
賢一、石を拾い上げ、啓子を見る。啓子は消えた焚火を見ていて、気づかない。
賢一、石を思い切り振り上げて、啓子の後頭部に振り下ろす。
啓子、倒れる。
賢一、息を切らして啓子を見る。
横田の声「ぎゃあー！」
賢一、振り返ると、遠くに横田。

横田「何やっとるんじゃ！」
賢一、横田の元へ走る。横田、逃げる。
○同・岩場（夜）
走って逃げる横田と、追いかける賢一。
横田「来るなあ！誰か助けてくれえ！」
横田、岩場に足を取られ、
横田「（叫び）」
と、崖から消える。
賢一、崖から下を覗き込む。横田の頭から流れる血で岩が赤く染まっている。
○同・浜辺（朝）
横田のボートが停まっている。賢一、錆びた針金を鍵穴に挿して動かすが、エンジンは掛からない。
賢一「……」
賢一、針金を投げ捨て、ボートのエンジンを数回蹴り、その場にしゃがみこみ、啜り泣く。

啓子の声「……ねえ」
賢一、驚いてゆっくりと振り返る。
そこに、頭から血を流している啓子。
賢一「あ……お前……」
啓子「ここ、どこ？」
賢一「……？」
啓子「私、どこかで頭をぶつけたみたいで、
何で私、こんな島にいるの？」
賢一「……覚えてないのか？」
啓子「……ねえ、私、どうしたらいいの？」
賢一「……」
賢一、啓子の肩に手を回し、
賢一「……心配するな。お前は俺の妻だ。俺
が守ってやるからな」
啓子、笑顔で、
啓子「ありがとう。ねえ、私、これ拾ったの」
啓子、横田のマッチを渡す。
賢一、苦笑いし、マッチを一本取り出
して焚き火に投げる。
火は勢いよく燃え上がる。